

『日本後紀』における「伝」の性質

亀田隆之

は し が き

『日本後紀』に収められている「伝」が、他の国史のそれと異って、当該人物に対し厳正な論評を行なっているものの多くあることは、周知の事柄である。そして、その厳正さが、編者の一人であり編纂の中心人物であった藤原緒嗣の人間性からもたらされたものであることについては、すでに坂本太郎氏の論じられたところである。また「伝」の記事から当時の為政者の政治姿勢を窺いうることについては、佐藤宗諄氏や門脇禎二氏が興味ある見解を述べられている。⁽⁸⁾

これらの研究によって「伝」に含まれる問題は論じ尽された感があるが、仔細に検討するとき、なお二、三の問題を論じられるように思える。そこで、以下これについて述べてみたいと思う。

一 史料の整理

現存する『日本後紀』の中で本人の死去の記事に論評を加えているものとして、上は天皇から下は五位の官人や後宮の女性あるいは僧にいたるまで、三二例をあげることができる。いうまでもなく『日本後紀』には欠逸の部分が多いので、これがすべてではない。『類聚国史』や『日本紀略』の中に、逸文とみられるものが多く含まれているが、それを拾い出すと『類聚国史』三六例、『日本紀略』四例（両者に重複する場合は前者で採った）である。

さらに『公卿補任』・『扶桑略記抄』の中に引かれている次の記事は、『日本後紀』の逸文（そして論評の部分）とみてよいであろう。⁽⁴⁾

(A) 『公卿補任』

○紀梶長（大同元年十月三日中納言従三位にて薨す。大納言正三位船守の一男）

延暦十五年梶長尻付

性潤有雅量、好愛賓客接待忘倦、饗宴之費不問出入、步射容儀応為師模、但至犬馬翫好之物、不免嗜欲也、

○藤原縄主（弘仁八年九月十六日中納言従三位にて薨す。参議従三位大宰帥藏下麻呂の一男）

弘仁八年縄主尻付

伝云、性雖好酒、職掌無闕、遺忘内外、親族慕之、

○藤原冬嗣（天長三年七月廿四日左大臣正二位にて薨す。右大臣内麻呂の二男）

弘仁二年冬嗣頭書

冬嗣朝臣、器局溫裕、職量弘雅、才兼文武道叶變諧、寬容接物、能得衆人歡心云々。

○良峯安世（天長七年七月六日大納言正三位にて薨す。桓武天皇の子）

弘仁七年安世尻付

少好鷹犬、事騎射、自余伎芸皆稱多能、比及成立、始誦孝經、捨書而歎曰、名教之極其在茲乎。

いうまでもなく、これらの記事は、『日本後紀』には記されていたと思われる右四者への論評を、全文収めているとは限らないが、その一部（或いは大部）を記していることとは可能であろう。現存する『日本後紀』の中の同種の論評と比べていささかの遜色もないのであって、これらを逸文とみて不自然ではあるまい。

(B) 『扶桑略記抄』二

○善珠

延暦十六年四月丙子日、僧正善珠卒、年七十五、皇太子図其形像、置秋篠寺、法師俗姓安都宿祢、京兆人也、流俗有言、僧正玄昉密通太皇后藤原宮子、善珠法師實是息也云々、善珠尋師往學、遲鈍難入、初誦唯識論反覆無數、尔乃窮三藏之秘旨、分六宗之通衢、大器晚成、蓋此之謂也、已上
關史

○明一

延暦十七年三月丁未、沙門明一卒、春秋七十一、俗姓和仁部臣、大和国添上郡人也、住東大寺、法師依止釈門、宣揚聖教、心蘊海藏、名高日下、寔謂仏乘之玄匠、法王之大宝者也、及于晚年、以備後房、簪花全凋、尚含四照之色、蘭葉半落亦送十步之芳、沉乎才為出世、器堪宗師、已上
關史

右の文章は、末尾の「己上国史」の語より『日本後紀』の中の「伝」を引用したものとみて差支えあるまい。論評

の部分の内容も『日本後紀』のそれと変るところはない。

以上『類聚国史』・『日本紀略』の他に論評を含む「伝」として六例をあげた。まだ他にも逸文としてとりうるものは多くあろうが、当面問題にしようにとする、死去の時の「伝」に論評が含まれているものとしては、『日本後紀』に収められているものと合せて総計七八例を数えることができる。⁽⁶⁾整理すると表Ⅰのようである。

〔表Ⅰ〕

出典	例数
日本後紀	32
類聚国史	36
公卿補任	4
日本紀略	4
扶桑略記抄	2
計	78

〔表Ⅱ〕

対象	人数	備考
天皇	3	王2名を含む 後宮女性を含む 藤原仲成・薬子
親王	1	
内親王	2	
僧	7	
三位以上	16	
四・五位	44	
罪人	2	
計	75	

〔表Ⅲ〕

氏族	人数	氏族	人数
安倍	6	伴	2
石川	3	羽栗	1
石上	1	羽林	1
大中臣	1	南北式京室	6
上毛野	1		6
賀陽	1		5
紀	7	文室	1
吉備	1	路和	1
佐伯	1	良峯	1
坂上	2	和氣	1
住吉	1	計	58
高根	1		
橘	5		

次にこれらを対象者の位階別、および天皇・親王・王・後宮女性・僧などを除いた官人を氏族別に整理したのが表Ⅱ、表Ⅲである。

二 論評の性質（その一）

さて、「伝」にみえる論評であるが、既述のごとく、この論評が対象者の政績や能力のみでなく、人格等にまで及んで忌憚のない文を綴っていることは、他の国史にその比を見ない。その批評は厳格・中正ともみられ、天皇といえども例外ではない。これらのことについてはすでに坂本氏が詳細に説かれており繰返すまでもない。

ところで、氏はこの論評につき「その文は概して簡潔であるが、卒直に長所と短所とを並べ挙げており、けっして長所のみを以て許すことはない。むしろ短所をあげる方が多いといってもよく、その批判はきわめて峻烈である」と述べている。たしかに大部分は氏のいわれるごとくであるが、既述の七五例をみると、賞讃に終始したり或いは好意的な筆致で記している論評をみることができないわけではない。一方、短所のみをあげて酷評とさえ思えるものも窺うことができる。いまそれらを「褒」・「貶」・「褒貶相半」の三つに分け、それを天皇・親王・王・僧・官人（氏族別に分類）などに当てはめてみると、表Ⅳのごとくである。

ただこうした分類は、論評の文の受けとり方によって変り、分類者の主観的判断がかなり入る余地があるので、絶対的にこうだと断定することは難しいのであるが、次のような文を一応の基準として分類してみた。

(A) 褒の例

〔表Ⅳ〕

対 象		褒	貶	褒貶 相半	計
天親内	皇王	1		2	3
	親王僧	1	1	1	1
安石	倍川上臣	2		3	2
	中毛	4		2	7
石大上賀	野陽	4		2	6
	紀	1	1	1	3
吉佐坂住高	備伯上吉根	4		2	1
	橘伴	1	1	1	1
羽	栗	1		2	1
	林	3		1	5
藤原	南北式京室	1	2	2	2
	路和	2	2	1	1
文	峯氣	3	3	2	6
	良和	1		1	1
計		1	1	1	1
		2		1	1
計		36	12	27	75

○藤原家雄 天長九年三月廿日卒

性清□有家風、頗学典籍、兼善步射、惜未執台簡、早閉泉扉。

〔類聚国史〕卷六六(薨卒)

○高根真象 天長八年三月八日卒

為人恭謹、頗弁白黒、出吏之間、肅清有聞、遂以旧臣、被敍從四位下。

(同 右)⁽⁹⁾

(B) 貶の例

○藤原藤成 弘仁十三年五月四日卒

口吃言語渋、歷任内外、無可無不可。

(同 右)

○藤原纒麻呂 弘仁十二年九月廿一日卒

為性愚鈍、不便書記、以鼎食胤、歷職内外、無所成名、唯好酒色、更無余慮。

(同 右)

(C) 褒貶相半の例

○紀作良 延暦十八年正月十六日卒

為人質直、無所容舍、更有小過、必糾以法、以此為下所惡、尤勤公政、晨出昏入、老而無倦。

(『日本後紀』)

○伴弥嗣 弘仁十四年七月廿二日卒

頗便步射、若好鷹犬、為人疾惡、不憚射人、晚而改操、暴慢不聞。

(『類聚国史』卷六六薨卒)⁽⁹⁾

この表よりみると、褒辭に終始した論評が意外に多いことに気づかれよう。いうまでもなく「伝」を記すにあたっ

て、故人の褒むべき行為や人格などは褒めようとの姿勢があるところに伝の意味があるともいえるし、事実そうした姿勢に沿う官人たちも存在したことであろう。また、僧侶の場合などは、有徳の智者として崇拜された者が多かったであろうから、褒の文章が多いのはむしろ当然ともいえる。和気氏の兩名は、天皇のいわゆる血の尊厳性を守りぬいた人物として、過度の評価がなされているとも考えられよう。

一方、逸文などの場合、褒の部分が残し、貶の部分は現存していないということも、可能性として存在するであろう。従って褒の分類に含めた人物が、褒貶相半する人物の分類に入る可能性もあるといわなくてはなるまい。

ただ、そうみると、既述の藤原冬嗣や、良岑安世の場合も、本来は褒貶相半するものであったのだろうか。ここで、さきに引用した藤原家雄の論評をみよう。この文はまさに褒のみに終始し好意的な筆致であるが、『類聚国史』の引用態度からは省略があるとは考えられないので、これは論評の全文とみてよいであろう。では彼についてどうしてこのような讃辞と愛惜に満ちた論評となっているのだろうか。

注意してよいことは、家雄は『日本後紀』編纂の中心人物である藤原緒嗣の長子であったということであり、父に先立って三十四才（『日本紀略』は四十四才に作る）で卒しているということである。

私は、家雄に才能が充分あったにしても、ここに緒嗣の亡き長男への愛情が窺えると思うのである。厳格・中正の緒嗣といえどもやはり人の親であり、こうした一文を記すところにむしろ彼の人間味をみることができなのではなかろうか。

この観点に立つとき、藤原冬嗣やその父の内麻呂に対する論評が讃辞に満ちていることも理解できるのではない。もちろん彼らはすぐれた政治家でありまた円満な人格者であったかもしれないが、むしろ承和七年十二月九日に

『日本後紀』を編纂撰進した、いわば最終編纂グループの一人に、藤原良房の名がみえることを看過できない。良房にしてみれば、自分の父そして祖父を讃辭で記すことは、子そして孫として当然の行為ではなかったろうか。内麻呂・冬嗣の「伝」がたとい緒嗣の手になるものであったにしても、そこに良房の意志が大きく加えられていたものと推測できると思う。そしてまた、冬嗣自身『日本後紀』の第一次編纂者として名を連ねた、いわばこの国史の編纂の当事者の側に身を置く人物であることも併考の余地がある。この点を考えるとき、良峯安世に対する論評が好意に満ちていることも、彼が冬嗣同様第一次編纂者グループの一人であることが大きく関係したものと考えられるのである。いうまでもなく、彼らの人格・教養が賞するに値する存在であり、政治的活躍もまたすぐれたものであったろうことを否定するものではない。しかし多くの官人が峻厳な批判の対象になっている中で、彼らへの論評が好意に満ちていることは、ただたんに彼らの才能や人柄のみによるのではなく、編纂者との濃い血縁関係や、同僚意識が働いていたと考えられるのではあるまいか。

一方、緒嗣もまたその一員であるにも拘らず、藤原式家に対しては酷しい批判がなされている。とくに種継の子息たちに対しては、仲成・薬子がいわゆる薬子の変の首謀者のためもあって酷評がみられるが、それだけではなく、事件と直接関係なかったとみられる纒麻呂に対しても、既述のごとき酷評を浴びせている。その弟の世嗣に対しては、天長八年三月十一日の卒伝に

弱冠遊博、自□銳心、知乏才華、不恥下聞、恭謹接衆、造次無忘……

（『類聚国史』卷六六薨卒）

とあって、筆は比較的緩やかではあるが、それでも讃辭に終るといふ性格のものではない。これは、同じ式家に属す

とはいえ、仲成・薬子らがその父種継に対する桓武天皇の寵愛の深かったことを利して、自己の家系のみの隆盛を意図し、しばしば専横の行爲に出、遂にはいわゆる薬子の変を惹起するにいたった経過を、緒嗣が直接に識っていたことが関係しよう。薬子・仲成の動きについて詳述する余裕はないが、伊予親王事件で南家の追い落しを図るとともに、同じ式家の緒嗣を東山道觀察使兼陸奥出羽按察使として中央政界から遠ざける策に出たことは、すでにいわれていることである。⁽⁶⁾式家の中にあっても緒嗣は仲成らと対立関係にあり、こうした点が仲成らの行動とあいまって、種継の子息たちへの酷しい批評となったものと考えられるのである。

もともと緒嗣の筆は、こうした仲成らに対してのみでなく、南家の乙叡や友人あるいは北家の道継や藤成にも酷しい。その酷しさはまた、佐味親王、吉備泉、大中臣諸魚、紀昨麻呂らにも及んでいる。こうした酷評は当該者の人格や行爲がもたらしたものと考えられるが、褒貶相半する評と併考するとき、中には緒嗣が一つの予断を以て臨んでいると考えられる場合がないわけではない。そしてそこに私は緒嗣の性格の一面をみうるようにも思えるのである。

彼はその薨伝に

曉達政術、臥治王室、国之利害、知無不奏

と称されたように、すぐれた政治家であり、政策において常に中正を意図した人物であったといえるであろう。延暦二十四年十二月に、廟堂において桓武天皇の政治を批判して

方今天下所苦、軍事与造作也、停此兩事、百姓安之

とその中止を献言した彼は、たしかに剛毅の気性を持ち厳正な政治を希う人物であった。しかし、同時に薨伝が有兩人説一事、其一人先所談是漫語也、一人後所道乃真実也、而確信先談、不容後説、有茲偏執、為人所刺。

と記すように、自己を信ずることが強く、いささか弾力性に欠ける性格がないではなく、ためにかなりの批判者を作る人物でもあったようである。従つて『日本後紀』の人物批評、とくに人間性や教養を問題にしている部分をみるとき、緒嗣のこうした人柄をやはり考慮に入れる必要があると思うのである。

三 論評の性質（その二）

ところで、論評から次の諸点にも注意が向けられる。すなわち①文化面、技能面への関心が比較的強く示されている点、および②国司在任中の業績を問題とすることが多い点である。以下これについて論じてみよう。

まず①の点であるが、官人に対する論評の総数五八例の中、学問を問題としているもの一一例、管絃を取扱っているもの五例、遊猟に關係するもの六例をあげることができる。この場合、学問關係については「頗学典籍」（藤原英雄）とか、「学老莊、能口自読如流」（安倍真勝）とかいうように、身につけることが望ましくそれを帯びる者は褒の対象とされているのである。これはすでに佐藤氏の説かれているように、当時の風潮として学問に対する熱意の現われとみることができるであらう。もちろんこうした傾向はたんに『日本後紀』に限られるものではないが、これに先行する『続日本紀』にはこの傾向は必ずしも強く示されていないことを思うとき、むしろこのように論評されている官人の活躍した平安初期が、あいつぐ漢詩集の撰進にその一面を示すように、学問の隆盛期と見られる時代であり、政局担当者にいわゆる文人官僚が登場してくる趨勢を背後に持つ時期であることを、考えさせるであらう。^(註)このことは音楽に關する面でも同様であつて、藤原三成や継彦が「一朝能琴之士也、人琴已往、誰復繼之」とか、「熱絃

管、雖三爵之後、曲誤必顧之」といったような賞讃の対象となっていることは、当時の宮廷における文化の一面がそこに示されているといえるのである。そしてまた遊獵が当時の貴族たちの好尚として重きを加えつつあったことが、「好愛鷹犬」とか「少愛鷹犬」とかいった批評として示されるにいたったものであろう。それらは論評の対象者や論評者の個人的嗜好によるというよりも、むしろ当時の宮廷が要求し、その習熟者を賞する空気が、かなり濃厚に存在したことの現われと理解すべきではあるまいか。

では②の点はどうであろうか。論評をみると、その中に「任相摸介、……政声著聞、転任守」（路年継）とか「至於從政、不失民心」（紀田上）とか、或いは「出任伊予介、歴出雲常陸大和越前守、並以幹濟聞」（紀末成）といったように、国司在任中の政績を賞する文のみえる一方、「任上野守之時、例挙之外申加挙、国多未納之煩、民有逋負之苦」（佐伯清岑）とか、「歴職内外、無所成名」（藤原縵麻呂）とかいうように、政績を批判されている例をみることができるのである。⁽⁶⁴⁾

こうした論評は、四位の官人四一名の中、一四名を数えるのであるが、このように国司としての行動を問題にしていることは、やはりそうした姿勢が編纂者の側に存在したことを語るのではあるまいか。

周知のごとく『日本後紀』編纂の中心人物である藤原緒嗣は、大同元年五月廿四日に六道觀察使が設置されたさい、山陰道觀察使に任ぜられ、以後引続き畿内・東山道の觀察使の任にあり、民生の安定に意を注いだ人物であった。しかも『公卿補任』大同三年の緒嗣の項には

臣前言可置諸道觀察使、天鑒降乞、依即所請

とみえて、この觀察使の設置は緒嗣の奏上によるものであったことが知られるのである。⁽⁶⁴⁾ 彼は觀察使在任中、積極的

に民生安定に意を注いだのであり、農民の待遇改善に関してもいくつかの上奏を残している。

こうした彼の政治姿勢を考えると、平安初期の官人の、地方官としての政績如何は、彼らの官歴の上で大きな位置を占めるものだけでなく、国家経綸の上でも見失なうことのできない事柄として、緒嗣の眼に映じたと考えて無理なものであつたろう。ここに、論評に地方官在任中の政績の記される理由の一つがあつたといえよう。

しかし、それだけではない。天長期、右大臣藤原冬嗣に代表され、大納言緒嗣も台閣の一員となっていた政府は、天長元年八月二十日に「公卿意見事」として、体制を維持するため積極的な政策を打ち出したのであるが、その中に良吏に関する政策や国守の選任に関する政策が含まれているのである。これにより以後の国司の行動・政績は、政局担当者のより注目するところとなつたのである。こうした情勢の背在を考えると、官人の卒伝、論評に、地方官としての行動が著しくとりあげられるにいたることは、充分考えられるのではなからうか。

そしてさらに、『日本後紀』撰者の一人として山田古嗣が存在していることを見失なうことはできない。彼は仁寿三年十二月二十一日に五十六才で卒しているのであるが、彼の卒伝に記されているように、天長六年および承和元年に外記局に勤務したさい、その有能さは公卿大臣を助けることが多かった能吏であつたが、同時に天長十三年に阿波介として赴任しても、

政績有声、阿波美馬両郡、常罹旱災、古嗣殊廻方略、築陂蓄水、頼其灌溉、人用温給、

と記され、廉直な官人であつたとともに当時の良吏の一人だつたのである。したがつて、こうした経歴を踏まえて『日本後紀』の編纂に参加したとき、主導者緒嗣の指示に⁽⁴⁾応じ、官人の卒伝の中に地方長官としての政績を採りあげるにいたつたことは、また古嗣自身の姿勢と一致するものであつたのではなからうか。臆測すれば、地方官の政績に

関する敘述は、多く彼の手になるものがあつたのではないかと考えられるのである。

結 び

以上、先学の騁尾に付しながら、『日本後紀』の「伝」に見える論評の性質について二、三論じた。いうまでもなく、これらの考察の中には、他の国史の「伝」と比較考察することによって、より理解されるものもある。ここでは紙数の関係もあつてそこまで及びえなかったが、それらについては今後の課題としたい。ただ、『日本後紀』の纂者と「伝」との関係、あるいは当時の政治事情と「伝」との関係を考察するにあたって、小論がいくらかでも役立つことがあれば幸と思う。

なお、論じ残した点や誤解に基づく見解も多いと思う。大方の御教示を切望したい。また、行論中、貴重な研究を漏らしているかとも思われるが、その点については深くお詫びしたいと思う。

(一九七三・一〇・二五)

注(1) 坂本太郎「六国史とその撰者」(『日本古代史の基礎的研究』上所収、一九六四年 東京大学出版会)・『六国史』(一九七〇年 吉川弘文館)

(2) 佐藤宗諱「平安初期の官人と律令政治の変質」(史林四七―五)

門脇禎二「律令体制の変貌」(岩波講座日本歴史古代3)

(3) 論評という語はあまり適当ではないが、他に適当な語を見出せないので便宜的にこの語を使用する。坂本氏のいわれる「論贊」および佐藤氏の記す「評価」と内容的に同じものである。

(4) 『公卿補任』の中に『日本後紀』の逸文のみえることについては

土田直鎮「公卿補任の成立」(国史学六五)
を参照。

(5) 例えば『公卿補任』の巨勢野足の尻付にみえる文などはそれであろう。

対 象	論評の あるもの	論評の ないもの	計
天皇	3	0	3
親王	1	6	7
王	2	7	9
王人	2	4	6
女性	0	4	4
官	58	49	107
後	2	25	27
僧	7	7	14
計	75	102	177

(6) 尤もこの中で平城天皇については『日本後紀』に三個所、『類聚国史』に一個所

論評がみえ、それぞれを一例として採ったので、人数より三例多くなっている。
なお、『日本後紀』・『類聚国史』・『日本紀略』などにみえる「伝」を、論評のあ
るもの、論評のないものに分けて整理した表を参考として上に掲げておいた。

(7) 坂本氏「六国史とその撰者」

(8) この他に既述の藤原冬嗣・良岑安世の例もあげられよう。

(9) この他にさきの藤原縄主・紀梶長の例もこれに含められよう。

なお、論評が短か過ぎたり、或いは褒貶を含む表現をみることができず、従って
本文のような分類が困難なもの(例えば巨勢野足・伴真臣・三諸大原の「伝」の
ようなもの)は、本文に記した七五例からはすべて除いてある。

(10) いわゆる薬子の変については次の諸研究を参照されたい。

北山茂夫「平城上皇の変についての試論」(立命館法学四四)

目崎徳衛『平安文化史論』(一九六八年 桜楓社)

大塚徳郎『平安初期政治史研究』(一九六九年 吉川弘文館)

門脇禎二氏前掲論文

(11) 佐藤氏前掲論文

(12) この点については拙稿「成立期の藏人に関する一考察」(日本歴史二六三)に若

干述べたので参照していただきたい。

(13) 興味あることにこうした論評はすべて四位の者に限られており、三位以上の者には地方官歴任の記載も論評もないのである

『日本後紀』における「伝」の性質

が、これは三位以上の者が国司を歴任しなかったのではなく、高位高官に昇ってからの政績を対象とする書き方によるためであろう。

なお、国司在任中の政績を問題とすることについては、佐藤氏も前掲論文の中で注意を向けられているが、氏が取り扱われたのは、たんに『日本後紀』のそうした記事のみでなく、これに続く国史の同種記事を併せた上での考察である。それゆえここで『日本後紀』のみから採って考察を加えることは、その撰者、論評者の性質とともに、当時の趨勢を考える上で意味があると思う。

(14) 坂本氏前掲書および前掲論文

林陸朗「藤原緒嗣と藤原冬嗣」『上代政治社会の研究』所収、一九六九年 吉川弘文館

(15) 坂本氏は前掲論文の中で「緒嗣は自ら執筆しなくとも、大綱方針は自己の意見によって授けたはず」と述べられている。それゆえ、地方官の政績に関する部分などは、緒嗣の意を受け古嗣が記すところがあったのではないかと考えるのである。